

その晩、凜はなかなか眠ろうとしなかった。ベッドに入ってから言峰が部屋から出ていくのを許さず、眠るまで話を聞かせてくれと言う。仕方なく言峰はベッドの脇に椅子を持ち出して二、三の話をしてやったが、そのどれもが凜の気には召さなかったようだ。

「ちよつと綺礼」

子供相手だからおとぎ話でも聞かせてやろうと、言峰は昔映画で見たシンデレラの話をしてやった。王子と結婚したあとうまくいかずに離縁されてしまった、シンデレラのその後の物語だ。

言峰の話を途中でさえぎった凜の顔は、苦い表情をしていた。

「何か問題でもあったかな、凜」

「眠れなくなりそう」

凜はおとなしく毛布をかぶり枕に頭を沈めているが、その目は爛々と開いていて眠気の片鱗もない。文句をつけながらも、凜はずっと自分の話を聞きつづけていた。部屋には読書灯だけが点され、夜の静けさがやわらかく照らしだされている。

「それは失礼した」

微笑んでみせた言峰に、凜が唇をとがらせる。

「もつとまじな話はないの」

「それなら、暖炉で焼かれた魔女の話をしてやろうか」

言峰は椅子から身を乗りだし、

「そうだ、とっておきの話がある。皆の倅せを願ったのが裏目に出て全部を無くしてしまった男の話だな。どうだ、聞きたいだろう」

「結構です」

凜の目は細められ、すでに怒りの色を帯びている。そして頭を振ると毛布を頭までかぶって黙りこんでしまった。

「そうか」

言峰は乗りだしていた身体を元に戻す。本気の申し出だっただけに断られたのはいささか残念でもあった。いつもの凜なら一応さわりぐらいいは聞くものだったから、この反応は意外だった。

「凜」

声をかけても凜は答えようとしなない。本気で拗ねたのか、それとも眠ってしまったのかもしれない。言峰があきらめて椅子から立ちあがろうとしたとき、毛布の一部分が不自